

健全な実証主義精神

DIO300号という記念すべき本号で資本主義の特集が組まれるということなので、邦訳が昨年12月に出版され今話題のトマ・ピケティ『21世紀の資本』を取り上げたい。

本書を（やや見栄を張って申告すれば英語版で）読み痛感したのは、著者の実証主義精神である。ピケティは、「厳密に定義された出所や手法、概念なくしては、どんな話も読み取れるし、その正反対の話だって出てきて」しまい、意見が違ってお互い聞く耳を持たない者同士で、「お互いが相手の怠慢を指摘することで自分の知的怠慢を正当化している」（邦訳p.3）と厳しく指摘している。データの根拠なき意見の対立は、実は馴れ合いにすぎないというわけだ。健全な議論は、健全な実証主義精神に宿るといえる。

ピケティは数量的な実証分析を行うことの重要性について、本文最後のパラグラフでこう述べている。

私は、あらゆる社会学者、あらゆるジャーナリストや評論家、労働組合や各種傾向の政治に参加する活動家たち、そして特にあらゆる市民たちは、お金やその計測、それを取り巻く事実とその歴史に、真剣な興味を抱くべきだと思うのだ。お金を大量に持つ人々は、必ず自分の利益をしっかりと守ろうとする。数字との取り組みを拒絶したところで、それが最も恵まれない人の利益にかなうことなど、まずあり得ないのだ。（邦訳、p.608。傍点は筆者による。）

なるべく数字に基づく具体的な話をすることが重要でも、古い昔のことになると、データの制約が……と言い訳が先に立って手を動かすのがおっくうになる。データベースを作るのは、コンピュータとインターネットが活用できる現在でも、労働集約的な作業だ。まし

てや19世紀後半からデータとなればなおさらだ。モノをいうからにはデータを揃えてからという実証主義精神と、そしてこんな途方もないプロジェクトを始めた勇気に圧倒される。

データに基づく議論は迫力を生む。かつて石橋湛山は「吾輩は切にわが国民に勧告する。^{けい}卿らは宜しくまず哲学を持てよ、自己の立場に対する徹底的智見を立てよ、而してこの徹底的智見を以て一切の問題に対するの覺悟をせよ」と述べた（『石橋湛山評論集』岩波文庫p.28）。ここで、「わが国民」を「政策を議論する者」に、「哲学」を「データ」にそれぞれ変えれば、本稿の主張となる。

かく言う石橋湛山自身から迫力ある議論の例を引こう。湛山は、大正9年の通関統計に基づく「徹底的智見」を以て、「経済的利益のために、我が大日本主義は失敗」（同p.115）であり、「朝鮮・台湾・樺太・満州の如き、わずかばかりの土地」（同p.121）を棄てることが賢明であり、「どうせ棄てねばならず運命にあるものならば、早くこれを棄てるが賢明である」（同p.114）と大正11年（1922年）に断言し、小日本主義を唱えた。

さあ、議論しよう。ピケティの議論も完全ではないように見える。なぜ資本収益率が成長率より高い、すなわち $r > g$ だと格差が拡大するのか。 $r > g$ は資本蓄積のメカニズムではあるが、資本の集中のメカニズムではないのではないか。さらに、本当に資本収益率は高いのか。では、なぜ資本収益率はゼロで資本主義が終焉するという意見が生まれてくるのか。さらには、マイナスの自然利子率が日本のデフレの原因であり、インフレにより実質金利をマイナスにする必要があるという議論とは、どう噛み合うのか。

こういう意見の違いがどこから生まれてくるのかについて、誠実に向き合うのが実証主義の精神だ。そうした知的誠実さなくして建設的な議論は生まれない。

（連合総研主任研究員 河越正明）